

心肺蘇生で同僚を救う

多治見市消防本部 バローを表彰



心肺停止に陥った同僚に適切な応急処置を行ったとして表彰された大島康晴さん(中央)と棚瀬和明さん(左)＝多治見市三笠町、市消防本部

心肺停止に陥った同僚に従業員が適切な応急手当を行い、回復につなげたとして、多治見市消防本部は6日、バロー(同市大針町)に消防長表彰状を贈った。表彰状を受けたのは、同社業務改善推進部課長の大島康晴さん(57)と同部農産

チーフトレーナーの棚瀬和明さん(44)。消防などによると、5月にバロー本部で行われた会議中、男性(当時58歳)が苦しみ出したことに隣席の大島さんが気付いた。同席していた棚瀬さんが119番。通信指令員の指示

を受けながら、胸骨圧迫と自動体外式除細動器(AED)の電気ショックを行った。

男性は市内の病院に搬送され、病院到着までに自己

心拍と自発呼吸が再開した。現在は無事に社会復帰している。

同市三笠町の市消防本部で表彰式があり、大島さんと棚瀬さんが加藤繁消防長から表彰状を受け取った。大島さんは「社内で実施し

たAEDの訓練が奏功した」と話した。加藤消防長は「適切な処置で救命の連鎖をつなげてくれた」とたたえた。

同本部によると、2022年までの10年間に心肺停止で搬送した件数は1224件で、うち769件で現場に居合わせた人が救命措置を行った。AEDが使用されたのは37件、1カ月後の生存が確認されたのは5件だった。(稲木悠司)